2 月 15 日 メッセージ

聖書：マルコによる福音書 4 ： 35 - 41

「イエスは眠っておられた」

「その日の夕方になって、イエスは、『向こう岸に渡ろう』と弟子たちに言われた」(マルコによる福音書 4:35)。弟子たちが船に乗り込んで出発したのはイエスが「行こう」と言われたからでした。もしかすると、ペトロやヤコブなどは漁師だった経験から、「この時間は危ない」と思っていたかもしれません。だから嵐に巻き込まれた時、「イエスを起こして、『先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか』と言った」(マルコによる福音書 4:38)。「あなたがこんな時間に出発しようと言ったから、こんなことになったのではないですか」と、問い詰める意図があったのかもしれません。

船が嵐に巻き込まれるという物語は旧約聖書のヨナ書にも出てきます。神から「あなたをニネベに遣わす」と言われたヨナは、「しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった」(ヨナ書 1:3)。

通常なら港で数日待って船に乗ることができるのが当時の常識でした。外洋を行く船なので嵐の危険が多くリスクも大きい。そこで、船員たちは当然、「大丈夫だ」と思われる時期や時間を選んで出発します。ところが、その船が嵐に巻き込まれてしまいました。船員たちは恐怖の中でそれぞれの神に祈りますが一向に止む気配がありません。「しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた」(ヨナ書 1:3)。

船員たちはヨナを起こして、自分の神に祈るようにと依頼します。すると、「ヨナは彼らに言った。『わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている』」(ヨナ書 1:12)。自分が原因だとわかっていながら、神の前から逃げ出すために知らぬ存ぜぬを決め込んでいました。逃げ出せるならば命を失っても良いと捨て鉢になっていたのかもしれません。果たして、ヨナを海に放り込むと嵐は嘘のように静まります。このように、神はたった一人の人間の動向にも気を配り続けられるのです。

一方、同じような嵐の中で「イエスは艫の方で枕をして眠っておられた」(マルコによる福音書 4:38)のは、どうしてでしょうか。それはもちろん、神を信頼しておられたからです。「主に依り頼む人は、シオンの山。揺らぐことなく、とこしえに座る」(詩編 125:1)と詩人が歌うように、泰然自若として少しも騒がれません。あたふたする弟子たちの姿とは対象的です。

「向こう岸へ行く」と決めている以上、船は必ず向こう岸へ着く。神がその道を整えてくださっているから何も心配することはない。眠っているイエスの姿はそのように語りかけてきます。

しかし、嵐の中にいる人間は、その声なき声を聞こうとしません。「溺れる者は藁をも摑む」とばかりに、神ならぬものにさえ頼ろうとします。眠っているイエスには救う力が無いと思っているので、わざわざイエスを起こして嫌みまで言います。全人類が、この世界全体が平和になるという大きな救いよりも、自分の周囲のごく小さな範囲だけが、この瞬間だけでも救われれば良いと思っているのです。

その傾向は近年、ますます強くなっています。社会全体も、そして教会自らもその流れに巻き込まれています。「だから、わたしたちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。そうでないと、押し流されてしまいます」(ヘブライ人への手紙 2:1)。

今、イエスが眠っておられるように思えて不安になる人もあるでしょう。救いは遠のいたと悲しむ人もあるでしょう。しかし、船は必ず向こう岸へ着くのです。嵐の中でこそ、私たちの生き方の本質が問われています。神は、小さな私たち一人ひとりをも見つめておられます。

まずは、深呼吸して落ち着きましょう。そして、神を信頼して私たちにできる精一杯を尽くしていく、新たな一歩を踏み出そうではありませんか。